

町民参加の町史づくり



# 竹富町史だより

2012・3・31

第33号



## 竹富町教育委員会

沖縄県石垣市美崎町11番地1  
TEL (0980) 82-6191

## 目次

『竹富町史』第二巻「竹富島」を発刊……………	1
第29回竹富町史編集委員会……………	2
業務日誌―町史編集係の動向……………	3
〔寄稿〕異人は「マニラ」の人々か？ 八重山蔵元絵師画稿と波照間島漂着人をつなぐ 里井洋一……………	6
〔文化財探訪〕25 北村隊の砲座跡……………	12
〔聖地めぐり〕27 前泊御嶽……………	13
〔写真にみるわが町〕28 ウミンチュの村……………	14
〔記念碑を訪ねて〕8 古見塩浜原開拓記念碑……………	15
〔新聞で知る町の今昔〕19 石西礁湖にある小島に新地名……………	16
受贈図書一覧……………	17
竹富町史の刊行物……………	19
編集後記……………	22

### ●表紙の写真●

「牛の島」で名を知られる黒島だが、かつて島一面にサトウキビが栽培されていた。大正期には第1回八重山郡甘蔗立毛品評会が行われ、キビ生産に熱が入った。

戦後は牛馬製糖場や小型動力工場が4カ所に設置された。黒糖は樽に詰められ、出荷された。黒糖生産が軌道の乗るなかで、黒島中型製糖工場の設立の動き出てきた。だが、さまざまな理由で同工場建設は頓挫した。島ではサトウキビは1967年（同42）以降、栽培されなくなった。

（写真提供：當山哲男）

# 『竹富町史』第二卷「竹富島」を発売



(提供：沖縄タイムス)

竹富町の七つの島じま編のトップを飾る『竹富町史』第二巻「竹富島」を、平成二三年度事業として発刊しました。発刊について、町史編集委員会の登野原武委員長は、「町史の中核をなす『島じま編』の出版を誇りに思いますが」と喜びました。次巻は第三巻「小浜島」編を予定しています。

本巻発行に向けて第一回専門部会が発足したのが平成十五年で、竹富島まちなみ館で産

声をあげました。以後、「島じま編」は島の出身者が、島の史資料を駆使して「手づくりの原稿」を執筆することに基本を置いて仕上げる、をモットーに作業を進めました。また、事務局の描いた、たたき台をもとに審議、論議を十一回ほど重ねました。そして、目次が仕上がりました。

本巻は、大きく「うつくみの心」「竹富島の集落景観」「種子取祭」の三本柱に据えて構成されています。

目次は、序章「うつくみの島 竹富島」を皮切りに「歴史と伝承」「教育」「人と暮らし」「信仰と祭祀」「人の一生」「言語伝承」「竹富島の芸能」「人物」「年表」「終章 竹富島の過去・現在・未来」から成り立っています。執筆者は十八人で、最新の研究成果が盛り込まれているほか、参考文献中、参考箇所のページ番号が記載されるなど、研究者にとっても使い

やすい編集方法を採用しています。

この中で注目されるのは、同じ歴史事象を扱っているのに一つは「オヤケアカハチ事件」であり、もう一つは「アカハチ戦争」であるということ。 「事件」と「戦争」では大きな違いです。これは執筆者によって、首里王府に対抗したオヤケアカハチに対する世界観が異なるということです。これまでは「オヤケアカハチの乱」が一般的でしたから、オヤケアカハチを再考する機会になると思います。それから二十八カ所の御嶽の位置を地図で示してあることです。

終章では阿佐伊孫良委員が「うつくみの島・竹富島。時代はどのように変わっても、島の気高さと気品を失わない島であって欲しい。そのために現在の私たち竹富人は、何をなすべきであるかをいまこそ真剣に考えなければならぬ」と訴えています。

川満栄長町長は、「この町史を礎に、今後生まれてくる町民にも輝く町の歴史を引き継いでほしい」と期待しました。

本巻は、B5判で巻頭カラー8頁、本文七〇〇頁で頒価三、一五〇円(税込み)。石垣市沖繩本島の書店で委託販売しています。

## 第二十九回 竹富町史編集委員会

第二十九回竹富町史編集委員会が、平成二十四年三月九日、午前一〇時より、石垣市港湾ターミナル会議室にて、次の次第で開催された（出席者は編集委員十六人（欠席者二人））。

- 一 竹富町史編集委員長挨拶 登野原 武
- 二 竹富町長挨拶 川満 栄長
- 三 竹富町教育長挨拶 慶田盛 安三
- 四 経過報告 事務局
- 五 協議

最初に登野原編集委員長よりあいさつがあり、「竹富島」発刊について、専門部会、事務局に労いの言葉があった。難産末の発刊であったが、学術的にも高い評価を受けていることに、「島じま編の最初を飾るにふさわしいものになった」と評価した。

続いて川満町長は「竹富島」の発刊は歴史のみならず、島人の生活や生き方、心まで次世代に伝える貴重な書となった。今後も続く「島じま編」が計画通り発刊できるよう努力してほしい」と期待を込めて挨拶した。

慶田盛教育長は、『竹富島』発刊の喜びの言葉を述べ、本書の活用例のひとつとして「島から学ぶためのテキストとして、

教育においても大いに活用すべきだ」と提案した。

主な協議事項は（一）『竹富町史』第二巻「竹富島」発刊の報告、（二）島じま編進捗状況の報告の二つ。（一）について、竹富島編専門部会長・石垣久雄氏は大方の好評を得ているが、取り組みにおける反省を次の五点にしぼって説明した。

- （一）原稿の締め切りが守れなかった。
- （二）原稿の締め切り後に不足する項目を新たに増補した。
- （三）専門部会による審査機能が機能できなかった。
- （四）完全原稿に達していない。
- （五）事務処理が追いつけなかった。

そして、「これらの反省点を続く「島じま編」で生かしてほしい」と結んだ。その後、各島の進捗状況が報告され、あらためて発刊計画が確認された。

そのほか、「その他」として「人物採択の基準について」「不採用の原稿の扱いについて」「販売について」「竹富島」販売状況について「執筆者一覧の情報について」「方言表記について」「竹富町史たより」第三十三号について」「自然編」について」「前近代編」の発刊計画について」「竹富島」書評について「正誤表の必要性」などについて議論された。

## 業務日誌 二〇一一年度

刷製本について、町長の専決処分が報告され承認。

五月十九日 第二十八回竹富町史編集委員会開催。

二月 一日 竹富町史編集委員会編集委員を十七名に委嘱。

三月三十一日 「竹富島」編、印刷製本請負について、丸正印刷と改定契約を締結。

刷と改定契約を締結。

「小浜島」編、版下制作請負について、南山舎

と改定契約を締結。

「竹富島」編、印刷製本請負について、光文堂

コミュニケーションズと改定契約を締結。

四月 一日 仕事始め式。竹富町新任教職員歓迎の集い。

四月 五日 契約について現状報告会議（課長、課長補佐出席、於・町史編集室）。

席、於・町史編集室）。

四月 六日 町史編集事業計画変更に伴う対策会議（町長、

副町長、企画財政課長、企画財政係長、教育長、

教育委員会総務課長、教育委員会総務課長補佐、

町史編集係、於・町長室）。

四月二〇日 光文堂コミュニケーションズの高江洲義紀氏来

室。

四月二十八日 沖繩県地域史協議会記念誌原稿提出。

五月十三日 竹富町臨時議会にて、「竹富島」「小浜島」の印

「竹富島」「小浜島」未刊に伴う予算繰越の報告。

五月二十三日 「黒島」編専門部会臨時ミーティング（於・チ

サンリゾートホテル）。

五月二十七日 沖繩県地域史協議会研修。台風接近のため途中

退席。

五月二十八日 「黒島」編執筆者連絡会議、台風のため中止。

六月 一日 安里精善氏に竹富町史編集委員会編集委員を委

嘱。

六月 三日 「波照間島」編第4回執筆者連絡会開催（於・

波照間島）。

六月 三日 環境省に「環境省自然環境局国立公園課保管文

書」を請求。

六月 七日 「西表島」編、執筆依頼。

六月 十日 「新城島」編専門部会。

六月十二日 竹富町球技大会。

六月十三日 島袋綾野氏に「新城島」編 第三章「先島先史

時代の新城島」「歴史時代の村落と島民」の執筆

依頼。

- 六月十六日 石垣繁氏に「新城島」編「生年祝」執筆依頼。
- 六月二十日 「西表島」編締め切りの通知。
- 六月二十七日 倉庫整理。
- 七月十六日 「波照間島」編、親盛美智子氏資料調査。
- 七月二一日 「黒島」編、「郷友会」原稿受理。
- 八月 五日 「新城島」編、「原稿提出についてのお願い」送付。
- 八月十五日 「竹富島」編専門部会。
- 八月二十日 ばいぬ島まつり前夜祭。
- 八月二一日 ばいぬ島まつり。
- 八月二二日 「竹富島」編、狩俣恵一氏、金武正紀氏校了。
- 八月二六日 「鳩間島」編執筆者連絡会開催（於・琉球大学）。
- 八月二九日 「竹富島」編専門部会延期。
- 八月三一日 「新城島」編、原稿締め切り。
- 九月 五日 「新城島」編原稿督促。「竹富島」編専門部会。
- 九月 六日 「竹富島」編臨時専門部会。
- 九月 八日 南山舎とミーティング（上江洲儀正、大森一也、町史編集係出席、於・町史編集室）。表紙と巻頭カラー頁について。
- 九月 九日 西岡敏氏より「竹富島」編「言語」五校正受理。
- 九月十二日 倉庫整理。
- 九月十四日 光文堂コミュニケーションズの高江洲義紀氏が来室。
- 九月二六日 南山舎とミーティング（上江洲儀正、大森一也、町史編集係出席、於・町史編集室）。表紙と巻頭カラー頁について。
- 九月二七日 「竹富島」編、価格設定。
- 九月三〇日 「新城島」編、原稿締め切り。前津栄信「自然」受理。
- 九月 鳩間島「編原稿、吉川安一「子供の遊び」教育、大工義紀「海底火山の爆発」受理。
- 十一月 四日 登野原委員長と次年度予算についてのミーティング（課長、課長補佐出席）。原稿料は出来高制となる。
- 十一月 七日 増田昭子氏の黒島調査に同行。
- 十一月 八日 第十回「小浜島」編専門部会。
- 十一月 十日 大石直樹氏より小浜島・竹富島の写真提供あり。
- 十一月二八日 「波照間島」編、仲本学氏原稿「郷友会」受理。
- 十二月 六日 光文堂コミュニケーションズの高江洲義紀氏来室。
- 十二月 八日 出張、丸正印刷、光文堂コミュニケーションズ工場見学。

「竹富島」編、巻頭カラー頁の色校正（丸正印刷）。

十二月 十日 「西表島」編、原稿締め切り。

十二月十二日 河名俊男「地形・地質」（西表島編）受理。池田

敏子「食とくらし」（西表島編）受理。

十二月十九日 第十一回「小浜島」編専門部会。

十二月二十一日 崎浜事務機によるコピー機のメンテナンス。

十二月二十六日 第十二回「小浜島」編専門部会。

十二月二十八日 仕事納め式。丸正印刷から『竹富島』納品。

十二月二十九日 倉庫整理。

一月 四日 仕事始め式

一月 五日 丸正印刷に印刷費支払い。

一月 六日 「小浜島」編専門部会（臨時）。

仲間恵子氏（沖縄言語センター）来室し、沖縄言語センターの資料の活用について氏より説明を受ける。

一月十四日 「小浜島」編専門部会（臨時）。

一月二十六日 「小浜島」編専門部会（臨時）。

一月三十日 光文堂コミュニケーションズの高江洲義紀氏が

来室。

「小浜島」編の進捗状況とスケジュールを確認。

二月 二日 仲原稷氏（言語学専攻）に小浜島編の「言語」の校正を依頼。

二月十一日 やまねこマラソン。

二月十四日 『竹富島』発刊記者会見。

二月十五日 石垣市内で「竹富島」編、販売開始。

『八重山日報』に記事『竹富町史』第二巻「竹富島」刊行」掲載。

『八重山毎日新聞』に記事「町史『竹富島』発刊」掲載。

『八重山毎日新聞』に記事「町史『竹富島』発刊」掲載。

刊」掲載。

二月十七日 沖縄県地域史協議会出席。

『沖縄タイムス』に記事「最新の研究凝縮『竹富島』発刊」掲載。

島」発刊」掲載。

二月二十八日 真榮里泰山「書評 竹富町史『竹富島』『八重山毎日新聞』」に掲載。

山毎日新聞」に掲載。

三月 九日 第二十九回竹富町史編集委員会開催（於・石垣市港湾ターミナル会議室）。

市港湾ターミナル会議室）。

三月 十日 「西表島」編専門部会（於・竹富町史編集室）。

## 異人は「マニラ」の人々か？

八重山蔵元絵師画稿と波照間島漂着人をつなぐ

琉球大学教育学部教授

里井洋一

▼宮良安宣が十六歳の時描いた「異人の図」

石垣市立八重山博物館に『八重山蔵元絵師画稿集』がある。『八重山蔵元絵師画稿集』は鎌倉芳太郎が八重山蔵元絵師であった宮



異人の図(『八重山蔵元絵師画稿集』八重山博物館発行より転載)

良安宣から、一九二三年に譲り受けたものを八重山博物館に一九七五年に寄贈したものである。その画稿の中に、「異人風俗図」というタイトルの画稿が二点、「異人の図」というタイトルの画稿が一点ある。タイトルは鎌倉芳太郎さんが寄贈した時のメモ書きによるもので、その経緯については不明であると八重山博物館はいう。いずれも「異人」が描かれている。ではこの「異人」はどこの人であろうか。

「異人」を描いた画稿三点のうち、二点には次男宮良仁屋と記され、一点には毛裔氏と氏名が記されている。次男宮良仁屋とは毛裔氏九世安清の次男宮良安安宣のことと考えられる。宮良安安氏は、昭和六年に享年七十歳で死亡されたというから、一八六一年生まれで、一八八二年には権現堂改建にも加わったというからそれ以前から絵師の修行をしていたものと思われる。その後、一八九一年安宣は蔵元の絵師として常勤になり、蔵元が廃止となる一八九七年までつとめたという。まさしく最後の蔵元絵師であった。

「異人の図」には丑年という干支が記されている。丑年に安宣がこの「異人の図」を描いたであろうと想定すると、もつとも妥当な年が一八七七年(明治十年・光緒三年)、十六歳の時と考えることができる。なぜならば、一八六五年丑歳は余りにも幼すぎるし、一八八九年は、琉球処分後十年も経て、琉球王府の称号宮良「にや」を記すとは考えにくいからである。

▼一八七七年の漂着マニラ人





異人風俗図(『八重山蔵元絵師画稿集』八重山博物館発行より転載)

では、一八七七年に八重山に漂着した異人を、喜舎場水鏝は『八重山歴史』の中で次のように記している。

明治十年(一八七七)五月一日呂宋(ルスン)島のマニラの男女百九名が比島から清国へ航行中、嵐に逢い漂流して波照間島のリーフに坐礁したので、島の役人等は救助船を出して彼等を救助、介抱すると共に蔵元へ急報したので、蔵元からは宮里在番筆者を始め、大浜頭其の他の役人等は馬艦船で波照間島に渡り実況の調査を卒え、彼等を石垣島へ連行し

て登野城部落の東南海岸地帯に仮小屋を建て、彼等を收容して厚く接待したのである。急報に接した首里王府では使者を派遣すると共に、馬艦船一隻を与えて帰国させた。

このマニラ船漂着記録は、宮良殿内資料「頭役被仰付候以来日記」(以下「日記」)にも見出すことができる。全文をここに紹介する。

一五月朔日、波照間村江まんでいら国之内いくすかふる申所之者、男六拾九人・女三拾九人都合百八人乗合漂着二付、彼村濱涯二木屋作調召置介抱仕候段、役人方より問合之趣有之、早速通詞筆者国吉仁屋、同西平仁屋兩人くり舟より差越せ置候処、同十二日、大風吹起漂着外国船破損いたし候段、飛舟を以申来候付、諸事為□計、御在番筆者宮里里之子親雲上、頭大濱親雲上、惣横目平得首里大屋子、通詞役大濱与人仕上世座与人足若文子喜友名筑登之、御米漕宇良船より御渡海、同廿四日大地江乗渡、糸数御嶽東表二木屋作調相住させ置候処、船相與へ令帰帆呉度申出有之候付、尤帰帆之儀、前之沖より不年寄二付、大濱村船着江引廻、右船々頭并加子三人都合四人合力飯米相付、守護方為致置、船修補等外国人□相合、役者共申出表達物、十月七日、出帆之申出二而、同六日二者大濱村江引越候取究二而候処、五日七ツ時分計二者木屋達焼失候付、同日晩方大濱村江引越、番所江相住させ置候処、順風吹出遅逗留二付、同村後船着北表之濱江又以木屋作調召置、同廿日順風相成候付、出帆させ候事、

## 在番筆者頭惣横め

一右二付、主部衆先縁を以逗留中在番筆者・頭・惣横め、先縁を以大濱村江詰居、出帆之当日者御使者新崎里之子親雲上、在番筆者崎濱筑登之親雲上、頭宮良親雲上、惣横目宮良与人御差越、人数改を以船江乗付、九ツ時分計出帆、巳午之間江走通、七ツ時分より者帆影相見得不申候也、

一右二付、通詞役并筆者用聞方差越、滞留中取計候也、

一木屋焼失之時、式拾五人者海上廿日分飯米并肴等焼捨相成候間、重而被下度申出候付、其分之飯米并三才牛式疋相進候也、

一送下程品之儀、先例見合差進候也、

「日記」を中心に前記の喜舎場の紹介、および後述する大浜信賢・本田昭正両氏の研究、関連する資料をもとに、マニラからの漂着事件の経過を考察してみる。

## ▼波照間村への漂着

一八七七年（明治十年 丑年）旧暦五月一日、波照間村にマニラテイラ国イルクスカフルの者が漂着した。喜舎場によると、波照間島のリーフに座礁したとし、彼らはルソン島マニラ市の住人でフィリピンから清国へ向かう途中であったという。日記にみるマニラテイラ国イルクスカフルが、喜舎場の記載ではルソン島マニラ市と明言されている。一九三四年六月十日岩崎爾司宅で行われた

八重山郷土研究会の長老を集め喜舎場永鏝が座長を務めた談話会の一件に「明治十年漂着せる、マニラ船客百〇九名に対する救護美談」という項目があることから、この時すでに八重山の長老たちは、明治十年漂着民はマニラの人たちであったという認識を共通にもっていたと考えることができる。この時、集められた長老とは、上江洲由恭、豊川善佐、大浜景貞、大浜信列の四氏である。波照間島に漂着したマニラの人々は、「日記によれば」男性六十九人、女性三十九人、計一〇八人と認識されているが、後世八重山の長老たちは百九名であったと認識している。

波照間島では浜ぎわに木屋を作つてマニラの人々を介抱したという。

このマニラが波照間島で滞在した様子を、仲本信幸氏が氏のお父さんから聞いたという。その話を、大浜信賢「マンデーラ船漂流記」、本田昭正「仲本信幸遺稿集追加の部」（昭和四十七年九月二六日仲本信幸記述）をもとに、漂着の様子を箇条書きにすると次のようになる。

①五月一日、西白保真牛は、波照間島の西北イラブ暗礁（瀬）

に異様な形の船が碇泊しているのを発見した。船はちようど馬艦船とほぼ同じぐらいの大きさであった。

②西白保真牛は漂流船だ、と直感し、急いで村へ帰り周辺の各戸からカナバル（ひょうたん）を集めて水を入れ、刳船で漂着船に近づいた。

③船には女、子ども、乳呑児を含むおよそ百名が救いを求めて

いた。西白保真牛は水をあたえた。

④ 西白保真牛は船頭らしき者と手真似で意志疎通し、彼らはマ  
ンデーラの人で、清国に向う途中嵐にあい洋上を八百海里(約  
千四百キロメートル)を数日間漂流しこのリーフに漂着し  
た。

⑤ 真牛は、この船をイラブ暗礁から、ナーラザスの浜(現在の  
港)まで水先案内し、村番所の役人に報告した。

⑥ 驚いた島の役人は飛船で八重山の蔵元に飛船で急報した。

八重山蔵元では、波照間島からの報告が到着がごとくすぐに通  
詞筆者国吉仁屋・西平仁屋の二人をくり舟で波照間島に派遣して  
いる。

⑦ ところが、マニラの船は、再度嵐に襲われて大破し、三人の  
死者を出し、積荷も海中に消えてしまった。

⑧ マニラの人々は海辺の安里屋に収容された。

⑦にみるように、大風が吹いて、マニラの人々が乗ってきた船  
が破損してしまった。「日記」によると、五月十二日、この事態  
を八重山蔵元は緊急報告として飛船によって、蔵元にもたらした。  
蔵元では御米漕宇良船をチャータして、蔵元ナンバー2である御  
在番筆者宮里里之子親雲上をはじめ、八重山トップの頭大濱親雲  
上、司法警察総責任者である惣横目平得首里大屋子(豊川善唐)、  
通詞役大濱与人、仕上世座与人足若文子喜友名筑登之ら幹部を波  
照間島に派遣した。大浜信賢によると、この中に後に八重山村長  
になる上江洲由恭もいたという。

「マンデーラ船漂流記」・「仲本信幸遺稿集追加の部」によると、  
波照間島でのマニラの人々の生活は次のようであったという。

① 波照間では食糧やその他の生活必需品を提供したが、返礼は  
受け取らないよう役人に厳命されていた。しかし、マニラ人  
は強引に綿と銅貨を波照間の人に渡した。

② マニラの女性は綿を手足を使って上手に紡いでいた。

③ 服装は木綿の儒袴や股引きであった。

④ 子どもは銅貨を投げて重なる遊びをして、負けると勝った  
者が中指を曲げて相手の手の甲を打った。

⑤ 台風で遭難死した2人の遺体はフルマルの西側、すなわち現  
豊福丸工場の通路の西側に懇ろに葬った。

「日記」では、五月二十四日、マニラの人々を御米漕宇良船に  
乗せ、石垣島に連れてきている。

蔵元では、マニラ人たちが乗ってきた船をなくしたので、石垣  
島に彼らを連れてくることを決意し準備したのと思われる。実  
際に マニラの人々を住まわせる木屋を作るために必要な資材を  
五月十六日から十七日にかけて、白保、宮良両村から集めている。

▼糸数御獄東側で木屋がけ滞在

マニラの人々が石垣島へ渡り、糸数御獄の東側に木屋が組み立  
てられ、そこにマニラの人々が滞在した。石垣の人がみたこの糸  
数御獄での滞在の様子を、先述の大浜信賢「マンデーラ船漂流記」  
の古老の証言から簡条書きで紹介する。

① マニラの人々は朝晩バイブルを飾って神に祈った。

② 女性はひだのたくさんある幅のゆったりした長いスカートを  
つけ、そのひもを横のほうで結んでいた。男性はきちんとし  
た服に、てっぺんを二つに割った帽子をかぶっていた。

③ 彼らは午後五時頃には夕食をすまし、その後は盛装してダン  
スをしていた、という。

④ 彼らの山刀は非常に切れ味がよく、これを八重山人はイルク  
ソール刀と呼んでいた。

⑤ 彼らは草花の種子をたくさん持っていた。平得部落の瓦多那  
という古老が少年の時、三尺ぐらいの垂直な茎で白いりつば  
な花の咲くはイルクソール花 という草花があったという。

八重山蔵元絵師画稿の異人の様子は、②の服装にみる様子と符  
合し、糸数御嶽の東側滞在中に写生されたものではないかと考え  
られる。

#### ▼大浜から出帆

マニラの人々は「船を与えていただいた故郷へ帰して欲しい。」という要求を八重山蔵元に対して申し出た。八重山蔵元では、漂着事件を首里王府に報告し、首里王府は使者を派遣し、馬艦船一隻を与えて帰国させたと喜舎場永辨は先述の『八重山歴史』で言っている。首里王府がマニラの人々に与えた馬艦船は「そのはん船」という船で、一八七六年、八重山の上納米を積み出す船であったことが「新本家文書」からわかっている。その後「そのはん船」は大浜村に回送され、外洋船として修理改装される。この

修理改装に「そのはん船」の船頭と加子三人が大浜に動員され、彼らに飯米を支給し、彼らに「そのはん船」を管理させた。また、「そのはん船」の修理中は、八重山蔵元の重役である在番筆者・頭・惣横目が交代で大浜村に滞在した。また、通詞役、筆者も滞在し、修理に伴う雑務をこなした。「そのはん船」の修理は十月三日に終了したと思われる。

マニラの人たちは十月七日に出帆したいという申し出を、蔵元に行き、十月六日にマニラの人たちは大浜村に引越すことになっていた。ところが、五日七時分（午後四時頃）に糸数御嶽の東側の木屋が消失してしまったのである。「マンデーラ船漂流記」はこの火事を次のように記している。

子どもらの火遊びから仮小屋に火がつき、またたく間に燃えあがった。部落民は、警報の口笛「ピヨース」とともに現場に駆けつけたが、火勢が強くなるほどこしようがない。アーサ採りに行っていたマンデーラの婦女子も大急ぎで帰ってきたが、とうとう小屋に寝かせてあった三人の子どもが焼死してしまったのである。木屋が消失してしまったので、五日夜にマニラの人々は大浜村へ引越し、大浜村番所に住むことになった。木屋の火事で、二十五人二十日分の出帆後の海上飯米や肴を消失してしまった。その分の飯米支給を再度欲しいという願いがあり、蔵元はその分の飯米と三才牛二匹を支給した。蔵元がマニラの人々のために十月五日までに食料を集めていた様子を次の史料からも伺うことができる。

同年漂着外国人海上二十日分野菜肴寄遅二付川平村へ催促

検者十月三日より同四日まで

マニラの人々は大浜村番所に入つて、順風すなわち北風を待たが残念ながら吹いて来なかった。そのため、大浜村船着場の北側の浜に木屋をたてて、マニラの人々はまた木屋に滞在することになった。

十月二十日、順風が吹いたのでいよいよマニラにむけ出帆することになり彼らは船に乗り込んだ。蔵元からは、御使者新崎里之子親雲上、在番筆者崎濱筑登之親雲上、頭宮良親雲上、惣横目宮良与人が現地大浜村に派遣され、彼らは船に乗り込んで、人数改めを行った。

この人数改めで、平得の若者通称唐屋真が密航していたことが発見された。彼は密航の罪で波照間に流されたという。

マニラの人々を乗せた船は九つ時分（正午頃）大浜の湊を出帆、巳午の方向へ進み、七つ時分（午後四時頃）には帆影も見えなくなつたと「日記」に記されている。

なお、「仲本信幸遺稿集追加の部」には、マニラの政府は礼状と謝礼を波照間島へ贈つたのだが、役人が横領して波照間へは届かなかった。ところが、その不正が発覚したため、その役人は証拠隠滅し、西表島のゆつん行の船で投身自殺を図つたと記されている。

まとめにかえて

宮良安宣という絵師が廿歳に異人を描くチャンス、波照間や石

垣の人々が残した彼らの証言から、ほぼ異人はマニラの人々であつたといえよう。

近世、漂着した人に対して、隔離しながらも手厚くもてなすのが首里王府の方針であつた。しかし、マニラの人々に対しては、その隔離という原則が必ずしも守られていない状況をうかがうことができる。

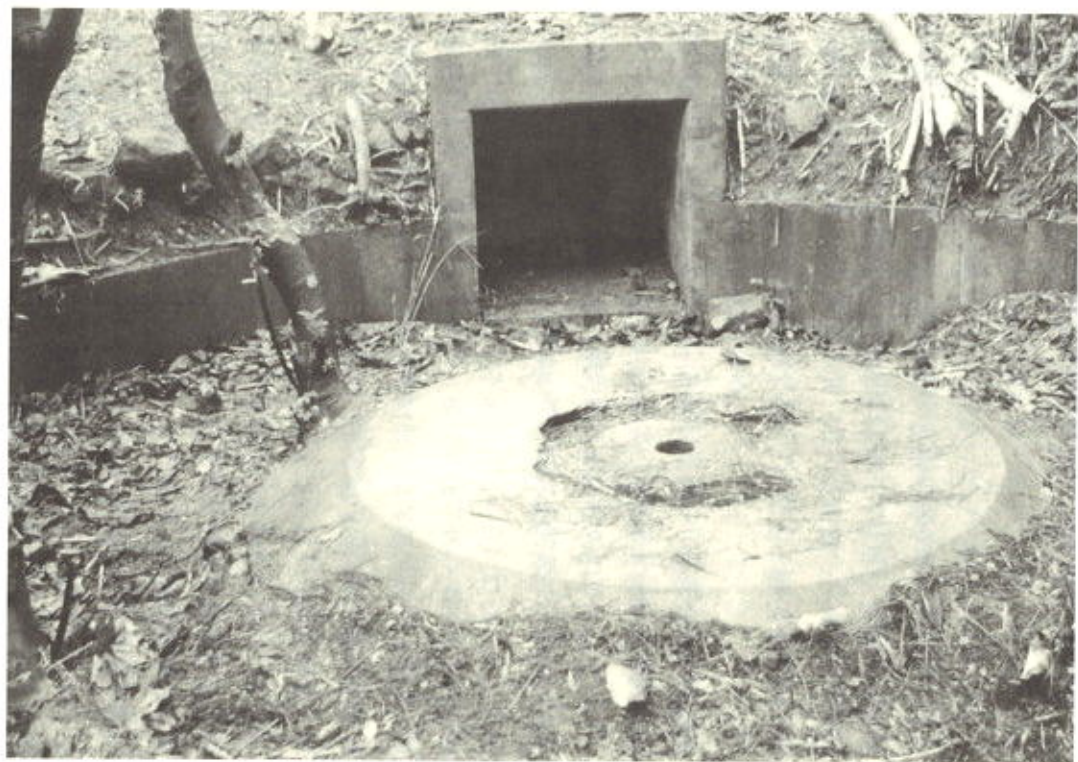
その一つ目は、地域の人々との交流である。波照間島ではひそかに物品の交流を行い、石垣島では恋愛にも発展したという伝承まで残っている。

二つ目は、マニラの人々は、明らかにキリシタンであり、神に対する祈りを石垣島の人々が目にしているということである。この時期首里王府は、薩摩が禁じた浄土真宗に対する弾圧をなおも続けていたことがわかつている。その首里王府の出先機関である蔵元がキリシタンにどのように判断していたのかを考える興味深い事例である。

蔵元絵師宮良安宣は、マニラの人々を生き生きとえがいている。この絵に描かれたような人々が百人余も八重山の人々と交流したと考えていいようである。大浜信賢は謝敷節の替歌として、次の歌詞を紹介し、マニラの女性の魅力を語っている。

糸数の前ぬ浜に　うちやいひく波や

マネラみやらびぬ　み笑い歯ぐち



《文化財探訪》25

## 北村隊の砲座跡

大本営陸軍部から一九四一年（昭和十六）九月、要塞司令部、重砲兵連隊等の編成が下令された船浮湾は天然の良港といわれ、湾を囲むようにして祖納半島、内離島、外離島、サバ崎には要塞を設置した。要塞の任務は東南アジアなどからエネルギー資源の石油等を運ぶ艦船の待避、停泊などを守備することであった。

軍事施設は西表島西部の祖納半島に配属された船浮要塞重砲兵連隊第二中隊（北村圭角中尉）が用いた野砲の砲座跡である。

戦時中、西表島西部には祖納半島からサバ崎に至る船浮湾を囲み、船浮要塞として四区の拠点陣地が設置された。要塞の中核となる司令部は、第一区として内離島に置かれた。第二区は重砲兵連隊第二中隊（北村圭角中尉）が祖納に駐在して守備を固め、第三区は重砲兵連隊第一中隊（小野藤一中尉）が外離島で守備についていた。第四区はサバ崎守備隊としてサバ崎に置かれ、山下少尉、上田少尉が任務を遂行していた。

要塞建設は軍事機密だとして竹富村（当時）当局にも通告しなかった。建設用地には監視兵を配備し住民の立ち入りを禁止した。そのため地域住民らは要塞の軍事状況を知る術がなかった。

第二区の北村隊は三八式野砲四門、探照灯一基を保持し、守備を固めていた。これを裏付ける同隊の砲座は、祖納半島の高台に四基残っている。今では雑木林や竹藪の中に埋もれていて人目に付きにくい。頑強なコンクリート砲座が往時の姿を止めている。

砲座跡は円形で大きさは直径約四尺、その中に野砲を据え付けた台座は直径約一・五尺ほどある。台座の中には一部砂岩を利用してあるものもある。北村隊の兵舎は上村の旧集落内に設けられたが、砲座跡には兵舎へ通じる道も一部残っている。今では雑木に覆われて場所を確認しにくい。

（通事孝作）

## 前泊御嶽



西表島西部の祖納集落にある御嶽。御嶽の前方の海には歌にもうたわれた集落の象徴マルマボンサンが浮かぶ。白い砂浜の海岸は、国の重

要民俗無形文化財に指定されたシチ（節祭）の会場となり、祭の時は多くの人々にぎわう。

嶽城の前方部はコンクリートブロックの低い塀と石垣で囲まれているが、イベ城および後方を囲うものはない。御嶽はマイドゥマリウガンといい、地元ではククウガン（穀御嶽）とよび習わしている。鳥居および扁額には「前泊穀御嶽」とある。『八重山島由来記』（一七〇五年）、

『琉球国由来記』（一七一三年）によると、神名は嶽名と同じで、イベ名はイヘシヤ小アシシヤ、由来は不明で、当時は慶田城村の所屬だった。近世初頭の西表島西部は入表間切に属し、祖納・干立・多柄・浦内・成屋・船浮・網取・鹿川の八力村があつた（宮古八重山両島絵図帳）。のちに一六二八年（崇禎元）の三間切移行時には大浜間切の西表村・慶田城村に統括された。『琉球国由来記』にみえる御嶽の所屬村から干立・多柄・浦内は西表村、成屋・船浮・網取・鹿川は慶田城村に属し、祖納村は西表・慶田城村の両村に分掌されていたことがわかる。祖納村が二分された時期や理由は不明。

一七三七年（乾隆二）の調査報告（参遺状）によると、西表村人口六八八人（但し、小村の人口合計は七〇八人）で、祖納・干立・浦内・多柄・上原の五小村からなり、慶田城村は人口

五五八人で、祖納・成屋・船浮・網取・鹿川の五小村からなる。

慶田城村の村名は祖納を本拠とした西表島きつての名家・慶来慶田城家にちなむという。現在のヤマニンジュ（山人衆）は錦芳姓の慶来慶田城家の系統であることから、あるいは慶来慶田城用緒などとの関わりが考えられる。村に豊かさをもたらす五穀豊穡の神を祀るといわれる。入口の鳥居をくぐると神庭で、奥に木造瓦葺の拝屋がある。拝屋の奥部中央に神棚が設けられ、香炉一基、湯飲み三個、花生け一対が置かれている。拝屋の数メートル後方からイベ城で、入口には石灰岩製の中にイベの祠があり、右手にはイベ城内部への入口が開かれている。また右手（南西側）に海に向けて、内離島にある成屋御嶽への遥拝御嶽の小祠がある。

祖納集落のシチ（節祭）は当御嶽を中心に、前方の海岸を舞台として執り行われる。御嶽の嶽域には神木である数本のクバ（ヒロウ）、トゥカナズ（ハスノハギリ）、フクギなどが鬱蒼と林立繁茂し、マルマボンサンが手にとるように近い。



(提供：大仲浩夫)

《写真に見るわが町》28

## ウミンチュの村

小浜島の西方、突端に位置する細崎集落。「クマンザキ」の呼称があり北・南部落からなる「上の集落」とは歴史的には地縁、血縁関係などは全くない。集落の創設は、明治末期に自由入植した糸満の人や本土の寄留民などによって設置された。これらの人たちは漁業で生計を立てる漁業入植で、当時は周辺海域にカツオの餌となる稚魚が多かったといわれる。

集落は入植以来、漁船の発進基地となり一九一八年（大正七）〜一九二一年（同八）頃からカツオ工場が建ち始めた。最盛期には工場の数も十三件にも達した。写真集『望郷沖繩』第三巻には坂田安次郎が小浜島の細崎で営んだ、八重山鯉節製造所の様子が収録されている。坂田氏は和歌山県出身で、八重山を開発した人物で知られる。各種事業に取り組み、そのなかでもカツオ節製造に尽力したことは有名である。

カツオ節の製造に関しては新聞資料で知ることができる。『先嶋新聞』の一九一八年（大正七）六月五日付け紙面に就鯉船調査一覧表が掲載されている。これによると、小浜島には三隻のカツオ船がいたことが分かる。第三大漁丸（坂田安次郎）、恵比須丸（濱崎莊市）、玉福丸（玉城三良）の船名が見える。

八重山でカツオ漁が盛んだった昭和三十〜四十年代の頃、細崎は餌である稚魚の供給地であり、カツオ漁業を支えた。近くの海には生餌を取り込んだ魚籠を浮かべていた。漁民は各カツオ船と契約を交わし、餌を確保し提供した。

写真は一九三三年（昭和八）に細崎集落の全景を上空から撮ったもの。家屋はほとんど茅ぶき。遠くに建つ円筒型の構造物はカツオ工場に煙突であろうか。港には二隻の漁船が停泊している。





(提供：松島昭司)

《記念碑を訪ねて》 8

## 古見塩浜原開拓記念碑

西表島東部の古見集落の県道二〇五線（県道・白浜―南風見線）が走る近くに古見塩浜原開拓記念碑が建っている。一九四九年（昭和二四）～一九五二年（同二七）には移住開墾の問題があり、開拓ならば適正な農家創設の見地から、その必要性が強調されてきたが、遅々として進まなかった。そのような中で、竹富島の青年一九人が古見塩浜原開墾を目指して結束し、開墾組合を結成、新井新勝組合長をリーダーに現地へ乗り込んだ。

古見塩浜原は俗に浦田原と称し、約三〇分の集団開田適地があり、水源関係が極めて有望、八重山民政府の開拓予定地になっている。そこで開拓事業を入れ、一九五一年（同二六）三月着工。一九五二年（同二七）五月に完成させた。竣工式は同年六月五日に行われた。古見集落の西方約二kmの地点、古見岳から流れる相良川の豊富な水量を取り入れた開拓の式典には、ルーニ大尉や當銘副知事など関係者が多数出席。水田を見下ろす丘陵で盛大に挙行された。

開拓事業には労務者延べ人員一万一九三六六人、セメント四五一袋、鉄線六三〇封度、総工費は用水路・排水路・道路・猪垣などに一・二一八千円を投入した。そして開拓面積は水田一三〇。竹富島出身の組合員は、あらゆる人力を投入して開墾し、一期作九・四畝の植え付け、米生産予想高二七・一石を見込んでいた。

開拓現場は、古見集落を左手に見る川の上流を三〇分ほど遡った所で、以前はアダンの繁茂する平原であった。しかし、それらはすべて取り払われて一面に水田と化し、山の裾野に白く光る高さ二・一〇分のコンクリート猪垣柱が開拓士の労苦を物語る。

だが、一九五三年（同二八）には三〇分の水田のうち二・三分は完全に台風と稲熱にやられて潰滅状態。葉稲にかかったものはその株さえなく、水田は一面雑草田と化した。その後も稲作は、予定どおり進まず、水田には黄金の稲穂が波を打つことはなかった。

## 石西礁湖にみる小島の新地名

竹富島と小浜島間の石西礁湖に岩礁、それに砂州が三、四カ所ほど浮かんでいる。現在、浜島と呼ばれているのだが、一時、それらの島は別の名前で呼ばれていたようだ。その岩礁などからなる島は嘉弥真島の近くにあり、西表島へ行く時、船舶から眺めると、島と島の間には浮かび、ゆったりした時を刻む。

地元紙をめくると、こういう記事が出てきた。「竹富西海の俗称浜島」が主見出しで、「當壯さんが『新字流島』にいうるじま」と命名、現地で命名式挙行」が小見出しの記事だ。新聞は「八重山毎日新聞」で、期日は一九五二年（昭和二七）三月十八日付け記事。新聞には、このようにある。

竹富と小浜の中間に大石が二、三個点々とあり、それを中心に小島（俗に浜島という）ができかかっているが、島名も付けず今日まで発表した人もいないで十五日古見からの歸路、小島近海を通りかかった宮良當壯氏が「新字流島」（ニイウルシマ）と命名。来る二十一、二十二日頃、同島で命名式を挙行、方々実測して面積を公表することになった。差し当たり目標の代り、間に合わせて五寸角の長さ八尺程度の木標を立てるが、この木標を寄贈する篤志家の出現を要望している。「中略」二十年前ここを通ったときは目立たなかったが、あんなに大きく成長したものだ。木も生えているが何の木だろう。

早く実測して命名しておかないと郡外人に名乗りをあげられるおそれがあるからね……」と當壯さん。とてもうれしそうに語った。

もうひとつの新聞は「自由民報」の一九五二年（昭和二七）三月三十日付け記事。主見出しは「當壯氏 忘れられた無人島へ 愛の命名木標」で、小見出しは「新字流と若女島」が付いている。同紙によると、このようにある。

宮良當壯氏は竹富と小浜の間の無人島へ、二十三名の同行者を伴い昨二十九日上陸、言語学者らしい歴史的な命名を行った。二つある島の中、大きい方に新字流島（ニイウルシマ）、小さい方に若女島（ワカナシマ）と命名、一丈余の木標を打ち樹てた。

新字流島は今まで八重山群島にあるか、なしか一銭の国税しかないという島であるが、大きさは東西三七米、南北一四〇米、周囲約七百米。植物はアダン、ソーキ、ハマユウ、地シバリ、浜ヒルガオ等、動物は蟻、蟹、やどかり、毛虫、とんぼ等、土質は砂質。

島は新聞記事から、「新字流島」と命名された。名付け親は八重山が生んだ言語学の大家・宮良當壯であることが分かる。しかし、「新字流島」と名付けたものの、その後の島名の普及度を見ると、住民の間に浸透しなかったようだ。国土地理院の地図をみると、今では「浜島」と元に戻っている。

## 平成23年度受贈図書一覧

多数の個人、関係機関等から寄贈を受けております。  
あわせてお礼申し上げます。

	寄贈者芳名
アメリカ世（ユー）の沖縄 一逞しくしたたかに生きてきたウチナーンチュー 第12回特別企画展（2011年・沖縄県平和祈念資料館）	沖縄県平和祈念資料館
ある離島教師の軌跡—石島英文伝—（1979年・三木健）	三木健
石干見研究の可能性—回顧と展望（『関西学院史学』第38号抜刷）（2011年・田和正孝）	田和正孝
石干見の呼称に関する覚え書き（『人文論究』第61巻第4号抜刷）（2012年・田和正孝）	田和正孝
伊波常雄教育関係資料目録（2010年・斎木喜美子）	うるま市立石川歴史民俗資料館
移民研究 第7号（2011年・金城宏幸編）	琉球大学国際沖縄研究所 移民研究部門
西表島研究 東海大学沖縄地域研究センター所報2009（2010年・東海大学沖縄地域研究センター）	東海大学沖縄地域研究センター
西表島仲村貞子ガイド学習実践の継承—船浦中「学びあい」のカリキュラム—（2011年・琉球大学教育学部 研究代表者／里井洋一）	里井洋一
浦添市移民史ビジュアル版 その1 海外移民編 世界に羽ばたいたウラシーンチュたち（2011年・浦添市教育委員会）	浦添市教育委員会
沖縄研究—仙台から発信する沖縄学—（2010年・犬飼公之）	宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所 犬飼公之
沖縄県公文書館研究紀要 第13号（2011年・沖縄県公文書館指定管理者財団法人沖縄県文化振興会）	沖縄県公文書館指定管理者財団法人沖縄県文化振興会
沖縄県平和祈念資料館だより No.21（2011年・沖縄県平和祈念資料館）	沖縄県平和祈念資料館
恩納村誌編さん室だより平成22年度—第12～17号—（2011年・恩納村誌編さん室編）	恩納村誌編さん室
恩納村博物館紀要 第6号（2010年・恩納村博物館編）	恩納村博物館
韓国の石干見に関する覚え書き（『関西学院史学』第34号抜刷）（2007年・田和正孝）	田和正孝
境界を越える人々—近世薩摩交流の一側面—（井上徹編『東アジア海域叢書2 海域交流と政治権力の対応』汲古書院〔抜刷〕）（2011年・渡辺美季）	渡辺美季
近世琉球の「地方官」と現地妻帯—両先島を例として—（山本英史編『東アジア海域叢書1 近世の海域世界と地方統治』汲古書院〔抜刷〕）（2010年・渡辺美季）	渡辺美季
近代八重山のマラリアと集落存続（日本地理学『地理学評論』第82号第5巻、抜刷）（2009年、高橋晶子）	高橋晶子

近代八重山のマラリアと集落存続〈博士論文、東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科学校教育学専攻社会系教育講座〉(2010年、高橋晶子)	高橋晶子
航空科学専門学校開設認可申請書類 一東海大学資料叢書1一 (2011年・東海大学学園史資料センター)	東海大学学園史資料センター
詩歌集 おもと連山 (1976年・石島英文作詩、新城師良編)	三木健
首里城公園管理センター調査研究・普及啓発事業年報 創刊号 (2011年・富田祐次編)	海洋博覧会記念公園管理財団
首里城尚家関係者ヒアリング調査業務報告書 (2010年・株式会社国建編)	海洋博覧会記念公園管理財団
首里城のデザイン (2011年・首里城公園管理センター編)	海洋博覧会記念公園管理財団
新収蔵品展 第16回 (2011年・うるま市立歴史民俗資料館)	うるま市立歴史民俗資料館
精選八重山古典民謡集(三) (2011年・制作・編著/當山善堂)	當山善堂
戦後沖縄教育の歩みと「伊波常雄教育資料」展 (2011年・うるま市立歴史民俗資料館)	うるま市立歴史民俗資料館
竹富方言辞典 (2011年・前新透)	前新透
東海大学学園史ニュース 第6号 (2011年・東海大学学園史資料センター編)	東海大学学園史資料センター
毒ガス…沖縄にあった見えない兵器—平成23年度 平和資料展— (2011年・うるま市立歴史民俗資料館)	うるま市立歴史民俗資料館
なきじん研究 vol. 17 古宇利島の祭祀の調査・研究 (2010年・今帰仁村歴史文化センター編)	今帰仁村教育委員会、今帰仁村歴史文化センター
年報 第22号 (2011年・公益財団法人沖縄県女師・一高ひめゆり平和祈念財団)	公益財団法人沖縄県女師・一高ひめゆり平和祈念財団
ひめゆり 第21号 (2010年・感想文集編集委員)	ひめゆり平和祈念資料館
ひめゆり 第22号 (2011年・感想文集編集委員)	ひめゆり平和祈念資料館
ひめゆり平和祈念資料館資料館だより 第47号 (2011年・ひめゆり平和祈念資料館)	ひめゆり平和祈念資料館
非文字資料研究No.27 (2012年・非文字資料研究センター)	得能壽美、渡辺美季、富澤達三
法政大学沖縄文化研究所所報 第68、69号 (2011年・法政大学沖縄文化研究所)	法政大学沖縄文化研究所
八重山の地域性 一南島文化研究所叢書1一(2006年・沖縄国際大学南島文化研究所)	高橋俊三
ヤル気にさせる本—正しいリーダーシップの発揮— (2011年・安里精善)	安里精善
与那原の沖縄戦—与那原町史 戦時記録編— (2011年・与那原町史編集委員会編)	与那原町教育委員会
琉球組踊 玉城朝薫の世界 (2004年・犬飼公之)	犬飼公之

## 竹富町史の刊行物

- 1、『竹富町史』別巻2 竹富町関係文献目録 1990年度(平成2) 関係機関へ配付  
竹富町関係の文献資料の標題、内容、所蔵機関等を各島ごとにまとめた調査研究のための手引き書。日本十進分類法(NDC)に準じて、一般、哲学・宗教、歴史、社会科学(社会科学一般、行財政、教育)、自然科学(自然科学一般、地理・地質、海洋・気象、植物、動物一般、鳥類、医学・衛生)、工学・工業、産業(産業一般、開発・土地問題)、芸術、言語、文学に分類して文献の発行日順に編集、末尾には所蔵機関を明記してある。B5版 ソフトカバー簡易製本 117頁。
- 2、『竹富町史』別巻3 写真集 ばいぬしまじま 1992年(平成4) ¥2,625  
明治時代中後期から現代に至るまでの島々の実相を、各島ごとに村落・自然、産業・交通、教育・文化・スポーツ、暮らし・戦争、祭祀・芸能の各項目に分類して写真で表現した資料集。92枚の写真を用い、各島ごとに、一言で島を知る題名を標題に付け、島の“顔”を呈示する。モノクロ写真を主体に編集しているが、巻頭にはカラー写真を用い、竹富町の“今”をアピールしている。写真から古き良き時代の島々を偲ぶことができる。A4版 糸かがり上製本 319頁。
- 3、『竹富町史』第十一巻資料編 新聞集成I 1993年度(平成5) ¥2,100  
1898年(明治31)から1918年(大正7)までの間、沖縄本島で発行された新聞の記事を集成した資料集。収録した新聞は、県内で最初に発行された、「琉球新報」(明治26年創刊)、「沖縄毎日新聞」(明治41年創刊)の二紙。「明治・大正期の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、文化等の記事を古い順に配列して編集した。県紙であるため、八重山関係の記事は少ないが、それでも西表炭坑や八重山の地誌等の記事は特値に値する。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 684頁。
- 4、『竹富町史』第十一巻資料編 新聞集成II 1994年度(平成6) ¥2,100  
1917年(大正6)7月から1933年(昭和8)12月までの間、八重山で発行された新聞の記事を集成した資料集。取り扱った新聞は「先島新聞」(大正6年7月～同15年8月)、「八重山新報」(大正10年2月～昭和8年12月)、「先島朝日新聞」(昭和3年5月～同8年12月)、「八重山民報」(昭和7年1月～同8年12月)の三紙。「大正・昭和戦前期の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の古い順に配列して編集した。資料集に盛り込まれた記事は村勢、マラリア問題、村の行財政、選挙等が注目され、往時の竹富村を浮き彫りにしている。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 724頁。
- 5、『竹富町史』第十二巻資料編 戦争体験記録 1995年度(平成7) ¥3,150  
アジア太平洋戦争中の町内の世帯別戦災実態調査、全戦没者数、戦争体験記及び沖縄戦、八重山の戦争をまとめた資料集。各島、各集落ごとに詳細な戦災調査を行い、町内における戦争の実態を明らかにしている。特筆すべきは戦時中の集落地図を作製するとともに、さらに集落ごとに各家族単位の戦争被害を具に図表にしてあること。この資料集から戦争マラリア等の惨事を浮かび上がらせ、戦争がいかに悲惨だったかが分かる。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 1,190頁。
- 6、『竹富町史』第十一巻資料編 新聞集成III 1996年度(平成8) ¥2,100  
1934年(昭和9)2月から1945年(同20)3月までの間、八重山と沖縄本島で発行された新聞の記事を集成した資料集。取り扱った新聞は「八重山新報」(昭和9年2月)、「先島朝日新聞」(昭和9年1月～同15年8月)、「八重山民報」(昭和9年1月～同11年6月)、「海南時報」(昭和10年8月～同20年3月)、「沖縄日報」(昭和11年11月～同15年10月)、「琉球新報」(昭和13年2月～同15年11月)六紙。「昭和戦前期の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の古い順に配列して編集した。資料に盛り込まれた記事は多岐にわたるが、当時の世相を反映し、戦時色の濃い記事が目立つ。それでも記者の島を訪ねてのルポルタージュ記事は、往時の島の一面を垣間見せる。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 720頁。
- 7、『竹富町制施行50周年記念誌』ばいぬしまじま50 1998年度(平成10) ¥2,625  
1948年(昭和23)の町制施行から1998年(平成10)までの竹富町の50年の足跡を写真、年表等で集成した記念誌。本誌は、島びとの暮らしや学校の様子、祭りなどがモノクロ写真を使用して編集され、その年の人口も掲載し、資料的な価値を持たせるように工夫してある。歴史年表は行

政に限らず、婦人会、青年会等の動向も扱い可能な限り詳細に、年別の事項を入れてある。また、姉妹町である北海道の斜里町との親善交流の歩みも盛り込まれている。歴代町長、歴代議会議員、町議会議長、各課課長の顔写真、職員の集合写真、竹富町振興日票も掲載してある。A4版 糸かがり上製本 247頁。

8、「竹富町史」資料集① 鉄田義司日記 1999年(平成11) ¥1,575

和歌山県久度山町出身の陸軍少尉(後に中尉・大尉)鉄田義司が残した戦時中に書き残した個人的な陣中日記。彼は1941年(昭和16)、内離島に司令部を置く船浮要塞に赴任したが、その後所属する大隊が石垣島に移転したため、石垣島に移った。日記には赴任の時から要塞での軍事訓練や、石垣島に移駐後に米軍機から初空襲を受けた時の様子、さらに1945年(昭和20)、敗戦後の復員までに至る経過を記す。八重山の戦争を知る同時代資料として価値を有する。A5版 ソフトカバー簡易製本 519頁。

9、「竹富町史」第十一巻資料編 新聞集成Ⅳ 2000年度(平成12) ¥2,100

1947年(昭和22)1月から1955年(同30)12月までの間、八重山で発行された新聞の記事を集成した資料集。取り扱った新聞は、「海南時報」(昭和22年1月～同30年12月)、「八重山タイムス」(昭和22年1月～同30年12月)、「南西新報」(昭和22年9月～同28年10月)、「自由民報」(昭和23年7月～同29年1月)、「南琉日日新聞」(後に「八重山毎日新聞」と改題、昭和25年3月～同30年12月)、「八重山新報」(昭和30年4月～同10月)の六紙。「昭和戦後期①の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の古い順に配列して編集した。資料集に盛り込まれた記事は、終戦直後の島々の様子を綴っているが、当時の新聞が一種の「政論新聞」だったこともあり、選挙に関する記事には政治色が濃厚に出ている。それでも紙面から島びとの暮らしを窺い知ることができる。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 842頁。

10、「竹富町史」第十巻資料編 近代2 2001年度(平成13) ¥2,625

南嶋民俗資料館(石垣市宇大川)が所蔵する崎原文書「必要書」、琉球大学附属図書館(西原町千原)が所蔵する宮良殿内文書「必要書類集」を集成した近代文書の資料集編。「必要書」は、崎原當貴が残した文書。當貴は1897年(明治30)に崎山村頭に任じられている。この文書は一種の備忘録で、日記の形式をとる。中でも「人々ヨリ到来物控」は、贈答品のやりとりがあり、往時の村びとの暮らしぶりが臘気ながら分かる。「必要書類集」は宮良殿内の直系である宮良當整が残した文書である。標題に「明治二十五年以降」とあるが、1896年(明治29)から1907年(同40)までの間の行政文書となっている。當整は白保村頭、新城村頭、竹富村頭を務めたが、行政文書は八重山島庁との往復文書、農業統計資料が中心である。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 348頁。

11、「竹富町史」第十一巻資料編 新聞集成Ⅴ 2002年度(平成14) ¥2,100

1956年(昭和31)1月から1960年(同35)12月までの間、八重山で発行された新聞の記事を集成した資料集。取り扱った新聞は「海南時報」(昭和31年1月～同34年4月)、「八重山タイムス」(昭和31年1月～同35年12月)、「八重山毎日新聞」(昭和31年1月～同35年12月)、「八重山新報」(昭和31年1月～同33年3月)の四紙。「昭和戦後期②の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の古い順に配列して編集した。資料集に盛り込まれた記事は、多岐にわたるが、西表島開発問題をめぐる様々な調査、早稲田大学八重山学術調査団に関する記事等は歴史の一齣として特筆される。なかでも、町長選挙等を巡る記事は、当時の政治の季節を反映し、激しい紙面づくりを展開している。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 843頁。

12、「竹富町史」第十一巻資料編 新聞集成Ⅵ 2003年度(平成15) ¥2,100

1961年(昭和36)1月から1964年(同39)7月までの間、八重山で発行された新聞の記事を集成した資料集。取り扱った新聞は「八重山タイムス」(昭和36年1月～同39年7月)、「八重山毎日新聞」(昭和36年1月～同39年7月)、「八重山朝日新聞」(昭和37年1月～同39年7月)の三紙。「昭和戦後期③の新聞集成」と位置づけ、政治、経済、教育、文化等の記事を年代の古い順に配列して編集した。収録された記事は、各新聞社によって特色があるが、総じて西表開発問題、町有地処分問題と新庁舎建設、八重山市町村合併と町役場移転問題、西表島での米軍事演習、大干ばつ、西表島での中学校統合問題、一年に二度の町長選挙等の記事がクローズアップされる。記事の中には現在に結びつくものもある。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 947頁。

13、『竹富町史』第十巻資料編 近代1 2004年度(平成16) ￥2,625  
竹富島喜宝院蒐集館が所蔵する明治30年代の文書を「近代1」として集成した近代文書の資料編。収録した史料は「村日記-明治37年以降」、「間切島会二関スル書類-自明治31年 至全37年・自明治37年至」、「報告綴-明治37年」、「人頭税領収証綴-自明治31年 至明治35年」、「契約及金銭物品二関スル諸証書-自明治31年 至全36年」の五点。喜宝院蒐集館にはこのほか、数多くの民俗資料等があるが、これらの一部は写真に収め、口絵として扱った。史料から人頭税施行末期及び廃止直後の島の様子を知ることができる。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 546頁。

14、『竹富町史』第十巻資料編 近代3 2005年度(平成17) ￥2,625  
琉球大学附属図書館が所蔵する宮良殿内文書のひとつ。明治30年代初中期の宮良當整日記を「新城村頭の日記」の副題を付け、「近代3」として集成した近代文書の資料編。宮良當整は1897年(明治30)から1903年(同36)まで新城村頭を勤めた。収録資料は新城村頭時代に書き残した「明治三十三年 日誌 宮良記」「自明治三十四年丑年旧正月 至全十二月 日誌 宮良當整」と表題の付された近代文書。文字中心の資料編だが、ビジュアル感覚を少しでも取り入れることを基本に、新城島にかかわる写真を口絵として配した。史料は當整の私的な日誌だが、明治期の新城島の人々の暮らしなどを窺知できる。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 600頁。

15、『竹富町史』第十巻資料編 近代4 2006年度(平成18) ￥2,625  
沖縄県地域史協議会がマイクロフィルムより複製した明治・大正・昭和戦前期の沖縄県に関わる『官報』の記事の中から、八重山関係の記事を検索して収録した資料編。副題に「官報にみる八重山」を付した。『官報』は1883年(明治16)7月2日に創刊され、以後、日刊紙として発行されている。記事は、国会・内閣・裁判所等で決定した事項を国民に知らせる広報紙および民間に関わる広告紙としての性格を有しているとはいえ、行政上の歴史的事実を知るうえで十分な資料的価値がある。記事の中には、人頭税の廃止を裏付ける法律の施行、鉱業権に基づき申請する石炭等の鉱物の試掘・採掘願いの記事もある。「新聞集成」と合わせて利用すると、近代八重山の側面が浮かび上がってくる。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 659頁。

16、『竹富町史』第十巻資料編 近代5 2008・2009年度(平成20・21) ￥2,625  
波照間公民館が原本(所在不明)を所蔵していたと思われる、財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室が複製本を所蔵する「島庁通達綴 自明治三十五年一月 至三十七年十二月 波照間村事務所」、「波照間島番所日記(明治二十八年~二十九年)、それに波照間小学校が保管する「波照間小学校沿革誌(第壱部)」の三資料を、「波照間島近代資料集」の副題を付け「近代5」として集成した近代文書の資料編。「島庁通達綴」が送付された時代は人頭税が幕を閉じ、日露戦争が勃発して日本が帝国主義を歩み始める時期にあたる。資料には日露戦争にかかわる通達等もある。また、標題がないため仮に付したであろう「波照間島番所日記」は1895年(明治28)~1896年(同29)までの村番所の動向を日記スタイルで書き止めたもので、島の人物が数多く登場し、祭祀も載っており貴重なものである。「波照間小学校沿革誌」は、1894年(明治27)~1948年(昭和23)までの学校の沿革を「第壱部」としてまとめられている。学校の生徒数、人事異動、記念日などが記され、太平洋戦争になると強制疎開のことなどが記されている。A5版 糸かがり上製本 ケース入り 434頁。

17、『竹富町史』第二巻 竹富島 2011年度(平成23) ￥3,150  
『竹富町史』の第一巻を飾る島々編の史誌である。第二巻「竹富島」には、序章「うつぐみの島」、第1章「集落と自然」、第2章「歴史と伝承」、第3章「教育」、第4章「人と暮らし」、第5章「信仰と祭祀」、第6章「人の一生」、第7章「言語伝承」、第8章「竹富島の芸能」、第9章「人物」、第10章「歴史年表」、終章「竹富島の過去・現在・未来」が盛り込まれている。巻頭には島の伝統芸能である、種子取祭などの写真が掲載され、視覚に訴える編集方法が取られている。同史誌は自然、歴史、文化、民俗、暮らし、言語、人物などを、できるだけ網羅するように配慮した。B5版 糸かがり上製本 700頁。

※ 竹富町史の刊行物は、石垣市・那覇市・宜野湾市の主な委託販売契約店での販売を行っております。詳細については、竹富町教育委員会総務町史編集係(電話0980-88-7220)までお問い合わせください。

## 編集後記

◆『竹富町史だより』第33号を発刊することができました。今号は『竹富町史』第二巻「竹富島」の紹介、寄稿として里井洋一編集委員の「異人は『マニラ』の人々か？八重山蔵元絵師画稿と波照間島漂着人をつなぐ」の論考、それに連載の「文化財探訪」「聖地めぐり」「写真にみるわが町」「記念碑を訪ねて」「新聞で知る町の今昔」などを盛り込みました。

◆第二巻「竹富島」は編集に着手してから八年間を要しました。執筆者は十八人です。目次は序章「うつくみの島 竹富島」を皮切りに「歴史と伝承」「教育」「人と暮らし」「信仰と祭祀」「人の一生」「言語伝承」「竹富島の芸能」などから、終章「竹富島の過去・現在・未来」で締めくくっています。

◆里井編集委員の論考は、八重山蔵元絵師画稿を鎌倉芳太郎が蔵元絵師の宮良安宣から譲渡したものを、八重山博物館に寄贈したものに基づいて執筆したものです。二枚の絵画をさまざまな視点から多角的に捉えています。蔵元絵師が描く絵画は時代を感じさせます。

(通事孝作)



平成24年3月31日発行

竹富町史だより

第33号

編集発行 竹富町教育委員会

沖縄県石垣市美崎町11番地1

☎ 0980-82-6191